

# 30amF-498

H1 受容体拮抗薬と H2 受容体拮抗薬のカラゲニン浮腫抑制作用に関する検討

○青江 和弥<sup>1</sup>, 五十嵐 彩香<sup>1</sup>, 小澤 麻里奈<sup>1</sup>, 寺島 朝子<sup>1</sup>, 前澤 佳代子<sup>1</sup>,  
堀 誠治<sup>2</sup>, 木津 純子<sup>1</sup>(<sup>1</sup>慶應大薬, <sup>2</sup>慈恵医大)

【目的】慢性蕁麻疹に対し H<sub>1</sub> 受容体拮抗薬 (H<sub>1</sub> 拮抗薬) の投与によって十分にコントロールできない場合, H<sub>2</sub> 受容体拮抗薬 (H<sub>2</sub> 拮抗薬) の併用療法が推奨されている。しかし, この併用療法の作用機序の詳細は明らかとされていない。そこで今回 H<sub>1</sub> 拮抗薬, H<sub>2</sub> 拮抗薬の抗炎症作用を明らかにするとともに, 併用投与時の抗炎症作用について検討する。

【方法】ラット (Wistar 系, ♂, 4W) に第一世代 H<sub>1</sub> 拮抗薬 4 種類, 第二世代 H<sub>1</sub> 拮抗薬 4 種類, H<sub>2</sub> 拮抗薬 3 種類を皮下投与 (5, 10, 50, 100, 200, 500 mg/kg) した。併用投与時の抗炎症作用の検討はヒドロキシジンおよびエピナスチンと H<sub>2</sub> 拮抗薬 3 種類を併用投与し行った。コントロール群には saline を皮下投与した。1 時間後に 1% λ-carrageenan を足蹠に皮下投与し 0.5, 3 時間後に足容積を測定した。

【結果・考察】単独投与時には第一世代 H<sub>1</sub> 拮抗薬 4 種類, 第二世代 H<sub>1</sub> 拮抗薬 3 種類が 100 mg/kg で有意 ( $p < 0.05$ ) に浮腫を抑制し, 用量依存傾向が認められたが, フェキソフェナジンおよび H<sub>2</sub> 拮抗薬 3 種類では浮腫を抑制しなかった。ヒドロキシジンとシメチジン (500 mg/kg) 併用時の浮腫抑制作用は単独投与時に比べ有意 ( $p < 0.01$ ) に増強し, ラニチジン (500 mg/kg) 併用時には増強傾向が認められ, ファモチジン併用時には増強されなかった。エピナスチンとシメチジン (500 mg/kg) 併用時は増強傾向が認められ, ラニチジン, ファモチジン併用時には増強されなかった。併用療法においてはシメチジンの高用量を併用することで単独投与時より強い抗炎症作用が得られることが示唆された。